

女子学生の YG 性格特性における被服行動と食行動との関連性について

～統計手法赤池情報量規準による分析～

The Relationship of Attitudes towards YG Personal Factors, Clothing Behavior, and Eating Behavior of Female College Students

～The analysis by the statistical method of Akaike's Information Criterion～

青海邦子 堀川 諭* 笹山 益子
Kuniko SEIKAI Satoru HORIKAWA Masuko SASAYAMA

1 はじめに

衣服は常に人間の生活とともにあり、社会の変遷によって推移してゆくものであったが、今日のように物質が豊かで、価値観が多様化した生活文化では、衣服において実用性よりも個人の嗜好性や審美性が優先される傾向にあると見受けられる。

YG性格検査（心理尺度テスト）の本来の用途は、あくまでも個々人の学生の性格特性を把握し、学生相談、生活、就職指導等の資料に活かされるのが目的で実施されるのであるが、本報ではYG性格特性が被服行動および食行動とどのように関連するかを心理的側面により考察を行った。

ところで90年代に入って、ますます日本文化への関心が高まっている。たとえば、我国独自の文化である、歌舞伎、大相撲、柔道、浮世絵、禅、茶の湯…といった、伝統的な文化が特に若年層において受け入れられ関心が高まっている。

一方、和服においても伝統的きものや服飾デザイナーズ・ブランドきものが大量に市場に出回り高い関心と支持を集めている。

このような現在における文化状況の中、本学女子短期大学生の和服に対する意識や行動が性格特性、食行動といかに関連するかについて検討したので報告する。

*大手前女子大学

2 調査の概要と目的

2・1 調査の対象者

本学の服飾学科・生活文化学科・秘書学科の女子学生196名（有効数）

2・2 調査時期

1991年5月20日～5月25日

2・3 調査方法

被服に対する意識と行動に関する調査では、質問紙を配布し、被験者に一部写真を提示しながら、集合調査を行った。心理的スケールについては、Y G性格検査を質問紙法形式で集合調査を実施し、食行動調査では、E A T¹⁾ (Eating Attitudes Test) に身体イメージ（自分の体型をどのように自分自身が感じているか）を加えた質問紙による集合調査を同様に実施した。このようにして作成した設問項目²⁾のうち表1～表3に示す56項目（被服行動26項目、Y G特性12項目、食行動18項目であり、被服行動と食行動については各設問項目のなかから任意に選択した）を対象とした。

表1 被服行動

変数名 (略号)	設 問 項 目	カテゴリー区分	度数 (人)	頻度 (%)
HQ02	人間は服装よりも自分自身が大切だから、着るものにこだわらない方が良いと思いますか。	1 そう思う	19	9.6
		2 そう思わない	140	70.3
		3 わからない	40	20.1
HQ03	あなたは他人と同じような服装をするのが嫌いなので、個性的な服を着るほうが良いと思いますか。	1 そう思う	81	40.7
		2 そう思わない	55	27.6
		3 わからない	63	31.7
HQ05	あなたは男性の目を意識して服を着ていると思いますか。	1 そう思う	63	31.7
		2 そう思わない	88	44.2
		3 わからない	48	24.1
HQ06	あなたは女性の目を意識して服を着ていると思いますか。	1 そう思う	96	48.3
		2 そう思わない	53	26.6
		3 わからない	50	25.1
HQ07	あなたは夏祭には浴衣（ゆかた）を着たいと思いますか。	1 そう思う	175	87.9
		2 そう思わない	20	10.1
		3 わからない	4	2.0
HQ08	あなたは服を購入する場合、素材が天然繊維の服（綿・麻・絹・毛）を主に選んでいると思いますか。	1 そう思う	75	37.7
		2 そう思わない	87	43.7
		3 わからない	37	18.6
HQ09	あなたは自分の服装に対して他人がどう思っているかを気にするほうですか。	1 そう思う	118	59.3
		2 そう思わない	55	27.6
		3 わからない	26	13.1
HQ10	あなたは服装は自己表現の有力な手段であると思いますか。	1 そう思う	141	70.8
		2 そう思わない	34	17.1
		3 わからない	24	12.1
HQ11	あなたは正月には着物を着たいと思いますか。	1 そう思う	149	74.9
		2 そう思わない	38	19.1
		3 わからない	12	6.0
HQ12	あなたはどちらかという目立たない地味な服装が好きですか。	1 そう思う	44	22.1
		2 そう思わない	109	54.8
		3 わからない	46	23.1

女子学生の Y G 性格特性における被服行動と食行動との関連性について

表 1 被服行動

変数名 (略号)	設 問 項 目	カテゴリー区分	度数 (人)	頻度 (%)
HQ14	あなたは少し高価でもデザインと品質のよいものを選んでいと思いますか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	96 50 53	48.3 25.1 26.6
HQ16	あなたは服の枚数は比較的少なくても上手に組合せて変化をつけたいと思いますか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	180 11 8	90.5 5.5 4.0
HQ17	あなたは流行の最先端の服を着るのは恥ずかしいですか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	46 109 44	23.1 54.8 22.1
HQ18	あなたは今日はどんな服を着ようかと考えるのは楽しいですか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	93 71 35	46.7 35.7 17.6
HQ19	あなたは外出する時に着る服がなくて外出がいやになることがありますか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	140 40 19	70.4 20.1 9.5
HQ20	あなたは流行に流されるのが嫌いで、はやりすたりのない服を選ぶほうですか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	108 50 51	54.3 20.1 25.6
HQ21	あなたは新しい服を買うときには気に入ったらすぐに買いますか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	107 67 25	53.8 33.7 12.5
HQ23	あなたは人の服装を見ていろいろと批判するほうですか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	78 94 27	39.2 47.2 13.6
HQ25	あなたは流行を追うつもりはないのに、いつの間にか流行に乗せられていることがありますか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	107 53 39	53.8 26.6 19.6
HQ26	あなたは服装によって美しく変身するのが楽しみですか。	0 無回答 1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	1 166 11 21	0.5 83.4 5.5 10.6
HQ27	あなたは有名ブランドの服を着てみたいと思いますか。	1 そう思う 2 そう思わない 3 わからない	133 35 31	66.8 17.6 15.6
変数名 (略号)	設 問 事 項	カテゴリー区分	度数 (人)	頻度 (%)
HQ30	あなたは成人式にはどのような服を着たいと思いますか。	1 振り袖 2 袴姿 3 ロングドレス 4 ドレッシーなワンピース 5 フォーマルなスーツ 6 その他	181 1 0 3 9 5	91.0 0.5 0.0 1.5 4.5 2.5
HQ31	あなたは卒業式にはどのような服を着たいと思いますか。	0 無回答 1 振り袖 2 袴姿 3 ロングドレス 4 ドレッシーなワンピース 5 フォーマルなスーツ 6 その他	1 21 152 4 6 14 1	0.5 10.6 76.4 2.0 3.0 7.0 0.5
HQ32	あなたは花嫁衣装にはどれを着たいと思いますか。	1 ウエディングドレス 2 白無垢(しろむく)に打掛け 3 1と2の両方 4 その他	75 3 118 3	37.7 1.5 59.3 1.5
HQ33	あなたはジーンズをはくのが好きですか。	1 好き 2 嫌い 3 わからない	139 26 34	69.8 13.1 17.1
HQ37	あなたが着てみたいと思うふり袖を、サンプル1～6の中から1つ選んで番号を()の中に書いてください。	1 濃青緑地に花と唐子模様柄で大正ロマン風 2 赤地に黒と金のぼかし分けで花柄で古典的 3 緑色地に辻が花柄で現代的 4 桃色地に金糸の雲取り柄で古典的 5 紫地に青緑と黒のぼかし分けでモダンな花柄で現代的 6 黄土色と青地の裾濃きものに御所解文様で古典的	14 68 16 28 36 37	7.0 34.2 8.0 14.1 18.1 18.6

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

表2 YG性格特性尺度

変数名 (略号)	性格特性項目	カテゴリー区分	度数 (人)	頻度 (%)
YG@D	抑うつ性	1 楽天的	122	61.3
		2 普通	73	36.7
		3 陰気	4	2.0
YG@C	回帰性傾向	1 冷静	87	43.7
		2 普通	102	51.3
		3 感情的	10	5.0
YG@I	劣等感の強いこと	1 自身家	51	25.6
		2 普通	128	64.3
		3 自身欠如	20	10.1
YG@N	神経質	1 神経質でない	91	45.7
		2 普通	93	46.7
		3 神経質	15	7.6
YG@O	客観的でないこと	1 客観的	88	44.2
		2 普通	78	39.2
		3 主観的	33	16.6
YG@Co	協調的でないこと	1 協調的	42	21.1
		2 普通	70	35.2
		3 非協調的	87	43.7
YG@Ag	愛想の悪いこと	1 消極的	92	46.2
		2 普通	87	43.7
		3 積極的	20	10.1
YG@G	一般的活動性	1 非活動的	47	23.6
		2 普通	116	58.3
		3 活動的	36	18.1
YG@R	のんきさ	1 慎重	17	8.5
		2 普通	112	56.3
		3 のんき	70	35.2
YG@T	思考的外向	1 熟慮的	135	67.9
		2 普通	49	24.6
		3 非熟慮的	15	7.5
YG@A	支配性	1 服従的	65	32.7
		2 普通	111	55.8
		3 支配性大	23	11.5
YG@S	社会的外向	1 地味な人柄	139	69.9
		2 普通	51	25.6
		3 社交的	9	4.5

心理調査については、YG性格調査を実施して得られた各性格特性尺度（12特性）の粗点から個人得点を12尺度毎に算出し、検査用紙に記載されているパーセンタイル値から5段階判別の標準得点を判定し、その標準点を下位（1、2）、中位（3）、上位（4、5）のクラスに分けて解析に用いた。

なお、表3には、食行動および身体イメージにおける頻度集計結果を示した。

女子学生のY G性格特性における被服行動と食行動との関連性について

表3 食行動と身体イメージ

変数名 (略号)	設 問 項 目	カテゴリー区分	度数 (人)	頻度 (%)
EQ03	食事のことを考えただけで不安になる。	1 そう思う 2 そう思わない	7 191	3.54 96.46
EQ04	太りすぎるのが怖い。	1 そう思う 2 そう思わない	138 60	69.70 30.30
EQ15	もっとやせたいという思いに夢中になっている。	1 そう思う 2 そう思わない	88 110	44.44 55.56
EQ16	カロリーを消費するために一生懸命運動している。	1 そう思う 2 そう思わない	22 176	11.11 88.89
EQ17	一日に何回も体重を測る。	1 そう思う 2 そう思わない	21 176	10.66 89.34
EQ18	体にぴったりと合う服が好きである。	1 そう思う 2 そう思わない	44 154	22.22 77.78
EQ23	規則正しく生理がある。	1 そう思う 2 そう思わない	132 66	66.67 33.33
EQ24	自分はやせ過ぎだと人に思われている。	1 そう思う 2 そう思わない	18 180	9.09 90.91
EQ26	食事の時間が人より長い。	1 そう思う 2 そう思わない	62 136	31.31 68.69
EQ27	レストランで食事をするのが好きである。	1 そう思う 2 そう思わない	112 86	56.57 43.43
EQ30	ダイエット食品を食べている。	1 そう思う 2 そう思わない	5 193	2.53 97.47
EQ32	食べ物については自制心を発揮している。	1 そう思う 2 そう思わない	34 164	17.17 82.83
EQ36	甘いものを食べた後はイライラする。	1 そう思う 2 そう思わない	4 194	2.02 97.98
EQ37	ダイエットに夢中になっている。	1 そう思う 2 そう思わない	30 168	15.15 84.85
EQ38	空腹でいるのが好きである。	1 そう思う 2 そう思わない	7 191	3.54 96.46
EQ39	食べたことのないようなこってりしたものを食べてみるのが好きである。	1 そう思う 2 そう思わない	25 173	12.63 87.37
EQ40	食事の後に吐きたい衝動にかられる。	1 そう思う 2 そう思わない	8 190	4.04 95.96
BIMA	(身体イメージ) あなたは現在の体重をどのように感じていますか。	1 やせ・やややせ 2 ちょうどよい 3 やや肥え 4 非常に太っている	11 34 115 36	5.6% 17.3% 58.7% 18.4%

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

2・4 計算とデータ処理の方法

当該データの分析方法としては、分割表解析において赤池の情報量規準A I C (Akaike's Information Criterion)³⁾を用いた多次元分割表モデル分析を試みた。なお、種々の計算は京都大学大型計算機センターのFUJITSU M-1800システムを利用して行われた。A I Cによる統計解析には、文部省統計数理研究所で開発されたC A T D A P (A Categorical Data Analysis Program Package)⁴⁾、種々の統計分析にはS A S (Statistical Analysis System)⁵⁾を利用して行った。

3 結果と考察

3・1 A I Cによる被服行動分析

我々は、先に本学学生の被服行動とY G性格特性との関連性について報告⁶⁾を行い、被服行動の主要な要因を次の7点に括って述べた。つまり

1. 被服における同調性に対する反応と評価
H Q 02、H Q 06、H Q 09、H Q 23の各調査項目が該当する。
2. 被服による自己表現のしかと優越意識との関連
H Q 03、H Q 10、H Q 12、H Q 18、H Q 26の各調査項目が該当する。
3. 被服着用における性的魅力との関連
H Q 05、H Q 33、の各調査項目が該当する。
4. 被服と流行についての意識
H Q 17、H Q 20、H Q 25、H Q 27の各調査項目が該当する。
5. 被服素材に関する知識と活用に対する問題
H Q 08、H Q 14の各調査項目が該当する。
6. 被服の購買意識の動向
H Q 21の調査項目が該当する。
7. 被服に対しての全般的な関心度
H Q 07、H Q 11、H Q 19、H Q 30、H Q 31、H Q 32、H Q 33の各調査項目が該当する。

そこで、被服行動を着目変数とし、食行動(B I M A変数を含む身体イメージの自己判断を示す)とY G性格特性、着目変数以外の被服行動の56項目を説明変数として関連を見る為、C A T D A Pにより多次元分析を行い、A I C値を算出した。その結果図1に示す。

図1は、各着目変数に対する説明変数間のA I C値の大小を一目でみられるように、記号で表現したものである。A I C値により5段階に区分されている。この図では、記号の星印が最も関連性が強く、次いで、二重丸印、三角印、負の印となり、白地の箇所はその欄に対応する変数同志がA I Cの立場から見て独立(無関連)であることを表わしている。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

まず、本学学生の被服における同調傾向の項目として選択された「H Q02」、「H Q06」、「H Q09」、「H Q23」について関連を検討すると、

H Q02「人間は服装により自分自身が大切だから、着るものにこだわらない方がよいと思うか」を着目変数にした場合には、投入した説明変数群の中ではH Q06「女性の目を意識して服を着ていると思うか」が最も関連性の強い項目として選択された。次に、H Q06「女性の目を意識して服を着ていると思うか」では最も関連性の強い項目はH Q05「男性の目を意識して服を着ているか」であり、A I C値が-128.40となり情報量が非常に多い結果を得た。H Q06に対して性的魅力の項目として上げられているH Q05「男性の目を意識して服の着用」に相関が高いのは、着目変数に対する説明変数がきわめて類似的な質問項目であることから当然の結果と思われる。質問紙法による分析では相似たり、隣接する質問項目間の相関が高くなることはよく知られたことである。次にH Q09「自分に対して他人はどう思うか」との関連の強いのはH Q06である。

これらの結果から、H Q02、H Q09の設問に対してH Q06に強い相関がみられた。頻度集計の結果を考察すると、H Q02「着るものにこだわる者」140人（70.3%）、H Q06「女性の目を意識して服を着ている者」96人（48.3%）、H Q09「自分の服装によって他人はどう思っているか気にする方である者」118人（59.3%）となっている。衣生活論⁷⁾によれば、「私たちの生活は、他人との関係において、すなわち他人の存在が私たちの行動や態度を決めている。私たちは常に他人と同じでありたい、世間並み、他人並みという同調を望んでいる」（取意）とあるが、本調査結果においても同傾向の結果となった。このようにH Q02、H Q06、H Q09の各設問項目は衣生活論で示されている同調志向と本学学生の反応が一致していることが検証できた。

さらに、同調傾向の項目として選択されているH Q23「人の服装を見ていろいろ批判する方ですか」では、最適と選択された変数は食行動の項目E Q04「太りすぎが怖い」であり、次いでE Q15「もっとやせたいという思いに夢中になっている」、Y G@N（神経質）、Y G@R（のんきさ）、Y G@C O（協調的でないこと）でY G性格特性の項目が続いている。H Q23項目を着目変数とした場合は、被服行動要因の同調傾向よりも食行動やY G性格特性の項目に強い関連性がみられ興味深い結果となった。このことについて勘案すれば、H Q23項目の頻度集計では、人の服装をみて批判する者の割合が39.2%と比較的少ない。これは「服装規範（服装の社会的習わし）に対しては女子学生は中年女性より自由な態度を持っている」という研究報告⁹⁾に見られるように、若者は自由に衣服を選び、自由に好きな服装をして衣生活を楽しもうとしている傾向があるため、同一志向である他人との比較や批判をする必要が起らないためであろう。ゆえに、H Q23については、同調傾向との関連性が認められないと解釈される。さらにみても、Y G性格特性のN因子（神経質）の頻度集計では、神経質でないが45.7%であり、ふつうグループの者46.7%との比較がほぼ同率を示して

女子学生のYG性格特性における被服行動と食行動との関連性について

おり、神経質は7.5%と非常に少ない。次いでR因子（のんきさ）の頻度集計では、ふつうグループは56.3%であり、のんきな人は35.2%みられるが、慎重な人は8.5%と相当少ない。C_o因子（協調的でない）の頻度集計は、協調的な人が43.7%とふつうグループ人35.2%よりやや多く、協調的でない人も21.1%とかなり多い。つまり、「人の服装を見ている批判する方ですか」の設問に対して、N因子では神経質でない者やふつうグループの者が圧倒的な比率を示し、R因子ではふつうグループの者やのんきな人が非常に多く、C_o因子では協調的な人やふつうグループが多いという選択肢に強い反応が示めされたことを肯首しうる。

次に、服装での自己表現（個性化）の項目として選択された。HQ10、HQ18、HQ26の各項目についてもその関連性を検討すると、

まず、HQ10「服装は自己表現の手段であると思うか」を着目変数にした場合には、HQ26「服装によって美しく変身するのが楽しみですか」が最も有効な項目として選択された。また、HQ26を着目変数した場合においてもHQ10が最適変数として選択された。次にHQ18「今日どんな服を着ようとするのは楽しいですか」との関連の強い項目はHQ10である。したがって、HQ10、HQ18、HQ26の項目間には高い相関関係性が認められた。さらにみると、流行に対する意識（HQ25）に関する項目も有意な項目として選択されている。文献⁹⁾によれば「人間は共同生活の中では、他人と自分を区別すること、と共に他と自分を同一化する傾向性が度々指摘されているところであるが、本調査における流行意識に関する項目の反応について見ても個性化と均一化の傾向を見ることができる。この個性化と均一化を視覚的にとらえる形で意味づけるのに最も効果があるのが衣の領域である。流行に対する関心やファッションはこの衣の領域に関する心理作用を利用したと考えられる。」本学学生に対する分析結果にも同様な傾向が数値として明確にあらわれている。すなわち、自己表現（個性化）を示す項目に関しては、流行に対する関心やファッションを重視するという比率の高かった結果から見ても明らかである。

次に、全般的な関心度の項目として選択された和服着行動の項目（HQ07、HQ11、HQ30、HQ31、HQ32）についての関心度について検討して見る。

まず、HQ07「夏祭には浴衣を着たいと思うか」に対して最も関連性の強い説明変数は、HQ11「お正月に着物を着たいと思うか」であり、次いで、HQ30「成人式にはどのような服を着たいか」、HQ31「卒業式にはどんな服を着たいか」となっており和服着行動における項目間に強い相関が見られた。頻度集計結果では「夏祭に浴衣を着たいと思う者」は87.8%（172人）と高い比率で着たいと望んでいる。

1982年¹⁰⁾と1988年¹¹⁾に実施した夏祭の浴衣の着用率の調査を比較すると、60.4%、84.2%であり、和服の着用比率が漸次増加の傾向を示していることが顕著にあらわれている。1992年に発行された“Ki-mono”¹²⁾によれば「最近の浴衣はDCブランドの名の入ったデザイナーの創作したものが多く売り出されていて若者達に受けている。」（取意）とあるがこれは、我々

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

の調査結果の反応パターンと同一傾向である。例を示せば、若い世代においては古来からイメージされて来た着物の感覚の枠を外れ着物を1つのファッションとして捉えている傾向が見られる。次に、H Q11「お正月に着物を着たいと思うか」では最も関連の強い項目はH Q07「夏祭りには浴衣を着用したいか」であり、次いでH Q30、H Q32となり、和服の着装行動における項目間に強い相関が示されている。

つづいて、H Q30「成人式にはどのような服を着たいと思いますか」の項目について検討して見た。

この設問項目は被験者に成人式という一生に一度の儀式における着用したい衣服の種類を選択させる質問である。この項目の頻度集計では「振り袖（178人）」90.8%、「袴姿（1人）」0.5%、「ドレスシーなワンピース（3人）」1.5%、「フォーマルなスーツ（9人）」4.6%、「その他（5人）」2.6%という結果となり圧倒的に成人式に「振り袖」を着用したいと望んでいることが分った。また、この項目を着目変数とした分割表比較分析では、H Q07「夏祭りに浴衣を着用したいと思うか」が最も有効な項目として選択され、次に、H Q11、H Q31、H Q32といった和服の着装行動における項目間との間に強い関連性が認められた。一方、Y G性格特性12項目、食行動について見た場合では着目変数H Q30に対して独立（関連がない）という結果を得られた。

次いで、H Q31「卒業式にはどんな服を着たいか」の設問はH Q30と同様に卒業式という学生達にとっては晴れの儀式において着用希望の衣服の種類を問うた設問である。

その結果、「振り袖（20人）」10.2%、「袴姿（151人）」77.0%、「ロングドレス（4人）」2.0%、「ドレスシーなワンピース（6人）」3.0%、「フォーマルなスーツ（14人）」7.0%、「その他（1人）」0.5%という結果となり、卒業式には最も多くの者が袴姿で出席したいと望んでいることが分った。

さらに、H Q31「卒業式にはどんな服を着たいか」を着目変数とした場合に最も関連性の強い項目はH Q07「夏祭りには浴衣を着たいと思うか」であり、次いで、H Q30、E Q39「食べたことのないこってりしたものを食べるのが好きである」となり、55項目の説明変数の中ではこの3変数のみが有意差のある項目として選択されたが、和服着装行動のH Q11「お正月には着物を着たいと思うか」とH Q32「花嫁衣裳にはどれを着たいと思うか」に関する項目はH Q31に対しては独立（無関連）となっている。これらのことから考えられることは、同じ儀式においても、学生の礼服着装の意識のなかでは、卒業式と正月・結婚式については弁別されているのではないかと考えられ興味深い結果である。

次に、H Q32「花嫁衣裳にはどんな衣服を着たいと思うか」では、「ウェディングドレスと白無垢に打ち掛けの両方」を希望する者が118人（59.3%）と過半数以上の者が着用を望んでいる。次いで「ウェディングドレス」が75人（37.7%）、「白無垢に打ち掛け」と「その他」が3人（1.5%）となっている。次いでH Q32「花嫁衣裳にはどんな衣服を着たいか」

女子学生のYG性格特性における被服行動と食行動との関連性について

を着目変数にした場合の関連の強い説明変数項目ではH Q11「お正月に着物を着たいと思うか」が最適変数として選択され、E Q39、H Q07、H Q30、E Q26となっている。

以上の結果を検証して見ると、本学学生においては、夏祭には浴衣の着用を希望し、人生の大切な節目である成人式には振り袖で参加し、学業最後の卒業式には袴姿で出席したいと希望し、お正月には着物を着たいと思い、結婚式には「白無垢に打ち掛け衣裳とウェディングドレス」と両方で披露したいと思っていることが明らかになった。

一方では、卒業式の設問に対してお正月と結婚式には有意差が認められず無関連となっている。これらを勘案すると学生達の和服着行動における意識は、夏祭りと成人式、卒業式においては同一化傾向が示めされ、他方、お正月と結婚式とが着意意識が一致していることがわかる。

最近の傾向としてファッション誌やマスメディアを駆使したきものメーカは、夏祭には祭りファッションとして浴衣、成人式には服飾デザイナーズ・ブランドの振袖、卒業式には袴姿というように若い世代に着物に対するイメージ化を行い、それらの行事や儀式がイベント化している。

これは、我々が今回実施した調査結果とも一致している。なお、被験者にとってはお正月と結婚式はあくまでも伝統行事として位置づけている事が示唆された。

以上、被服行動を軸にしたA I Cによる2次元分析について検討したが、多次元による分析結果については本紀要の笹山¹³⁾の報告を参照されたい。

4 A I CによるYG性格特性と被服行動について

4・1 A I CによるYG性格特性分析

本節では、YG性格特性テストにおける12因子特性を着目変数とし、被服行動と食行動、着目変数以外のYG特性を説明変数として多次元分割表分析を試みた。

説明変数には食行動調査の項目を加えたが、ここで、被服行動とYG特性相互の関連性を把握することに重点を置いたので食行動との因果関係については言及していない。

本来の用途、YG性格特性テスト¹⁴⁾は個々人の学生の性格特性を把握し、あくまでも個々人の学生相談、生活、就職、指導等の資料に活かされることを目的として実施されたものである。

しかしながら、本学学生を被験者群としたYG特性の傾向性を同一人に対して実施された被服行動調査項目との関連性を論じることは、無意味なことではない。

図2は着目変数である12項目のYG特性と説明変数56項目とのA I Cによる2次元分割表の関連度の強さを記号で示したものである。A I C値により5段階に区分されている。この図では、記号の星印が最も関連性が強く、次いで、二重丸印、三角印、負の印となり、白地

EXPLANATORY VARIABLES	RESPONSE VARIABLES									
	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y
(HQ02#1)										
(HQ03#2)										
(HQ05#3)										
(HQ06#4)										
(HQ07#5)										
(HQ08#6)										
(HQ09#7)										
(HQ10#8)										
(HQ11#9)										
(HQ12#10)										
(HQ14#11)										
(HQ16#12)										
(HQ17#13)										
(HQ18#14)										
(HQ19#15)										
(HQ20#16)										
(HQ21#17)										
(HQ23#18)										
(HQ25#19)										
(HQ26#20)										
(HQ27#21)										
(HQ30#22)										
(HQ31#23)										
(HQ32#24)										
(HQ33#25)										
(HQ37#26)										
(BIMA#27)										
(EQ03#28)										
(EQ04#29)										
(EQ15#30)										
(EQ16#31)										
(EQ17#32)										
(EQ18#33)										
(EQ23#34)										
(EQ24#35)										
(EQ26#36)										
(EQ27#37)										
(EQ30#38)										
(EQ32#39)										
(EQ36#40)										
(EQ37#41)										
(EQ38#42)										
(EQ39#43)										
(EQ40#44)										
(YG@S#45)										
(YG@A#46)										
(YG@T#47)										
(YG@R#48)										
(YG@G#49)										
(YG@Ag#50)										
(YG@Co#51)										
(YG@O#52)										
(YG@N#53)										
(YG@I#54)										
(YG@C#55)										
(YG@D#56)										

(NOTE) Δ $-0.050 < AIC/NSAMP < -0.010$
 \star $AIC/NSAMP < -0.100$ $-0.010 < AIC/NSAMP < 0.0$
 \odot $-0.100 < AIC/NSAMP < -0.050$ no mark $0.0 < AIC/NSAMP$

図2 A I Cの値の大きさを表す濃淡図

の箇所はその欄に対応する変数同志が A I Cの立場か見て独立（無関係）であることを表わしている。

図から明らかなように、Y G性格特性間で強い関連性のある事などが読みとれる。

まず、Y G性格特性における情緒安定性因子群はD（抑うつ性）、C（回帰性傾向）、I（劣等感の強弱）、N（神経質性）に分けられる。これらの関連を検討すると、

D因子を着目変数とした場合には、投入した説明変数群の中で5位まであげるとO因子（A I C値=-35.08）が最も関連度の強い項目として選択され、次いで、C因子、Co因子、N因子、Ag因子となっている。次に、C因子では最も関連性の強い項目はN因子（A I C値=-34.70）であり、次いでD因子、Co因子、O因子、5位のAg因子となっている。つづいて、C因子では最も関連の強い項目はN因子（A I C値=-28.05）であり、次いでR因子、C因子、S因子、5位のAg因子となっている。さらに、N因子では最も関連性の強い項目はC因子（A I C値=-34.70）であり、次いでCo因子、I因子、O因子、5位のD因子となっている。

これらの結果から、情緒安定性因子群における項目間との間に強い相関が認められた。これは、着目変数に対する説明変数がきわめて類似的な因子であることが証明され、この集合因子は

女子学生のY G性格特性における被服行動と食行動との関連性について

情緒面の安定性を表わす特徴ある因子群であることが検証された。

つづいて、Y G性格特性における社会的適応性因子群はO（客観的－主観的）、Co（協調的－非協調的）、Ag（消極的－積極的）に分けられる。これらの関連を検討すると、

O因子を着目変数にした場合には、投入した説明変数群の中で5位まであげると、D因子（A I C値＝－35.08）が最も関連度の強い項目として選択され、次いでCo因子、N因子、C因子、Ag因子となっている。次に、Co因子では最も関連性の強い項目はO因子（A I C値＝－29.11）であり、次いでN因子、C因子、Ag因子、5位のEQ24となっている。つづいて、Ag因子では最も関連性の強い項目はA因子（A I C値＝－32.84）であり、次いでG因子、R因子、Co因子、5位のC因子となっている。

これらの結果より、O因子、Co因子、Ag因子の項目間には高い相関性が認められた。さらにみても、情緒安定性因子群のC因子（回帰性傾向）に関する項目も有意な項目として選択された。

社会的適応性因子群とは、社会的適応、不適応を表す因子である。社会的適応、社会的不適応の中に社会ルールを無視して反抗的態度を示すとなっているが、関連因子としてC因子（冷静－感情）が選ばれているのは肯首しうる。

次に、Y G性格特性における主導的集合因子群はA（服従的－支配的）、S（社会的内向－社会的外向）に分けられる。これらの関連を検討すると、

A因子を着目変数とした場合には、投入した説明変数群の中で5位まであげると、G因子（A I C値＝34.10）が最も関連度の強い項目として選択され、次いでAg因子、S因子、R因子、5位でCo因子となっている。つづいて、S因子では最も関連性の強い項目はA因子（A I C値＝－27.33）であり、次いでI因子、R因子、G因子、5位でT因子となっている。

これらの結果から、主導的集合因子群における項目間との間に強い相関が認められた。

さらにみても、G因子（非行動性－活動的）、R因子（慎重－のんき）に関する項目も有意な項目として選択された。

5 Y G性格集合因子と被服行動との多次元分割表分析

Y G性格特性テストは前報¹⁹⁾に述べたように12の基礎因子からなり、その1つ1つの因子には深い意味がある。さらに、2つ以上の基礎因子が集まって1つの性格特性的な意味をもつ集合因子が形成される。

そこで、いくつかの着目する集合因子と主に被服行動における関連性についてA I Cによる多次元分割表分析の結果から考察する。

表4は各Y G性格特性を着目変数とした場合の最適変数の組合せとA I C値、被服行動に関する項目が選択された上位5項目の組合せと順位ならびにA I C値を示したものである。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

表4 YG特性を軸とした最適変数と被服項目ベスト5（全体の順位）

着目変数	最適変数組合せ (AIC値)	被服行動1	被服行動2	被服行動3	被服行動4	被服行動5
S (社会的外向)	A (-27.33)	A * HQ09(8) (-18.90)	A * HQ03(9) (-18.85)	A * HQ27(10) (-18.74)	A * HQ05(18) (-17.21)	A * HQ20(20) (-16.92)
A (支配性)	G * S (-37.26)	G * HQ21(10) (-27.0)	G * HQ19(11) (-26.91)	G * HQ10(27) (-22.53)	G * HQ10(27) (-22.53)	G * HQ08(34) (-21.52)
T (思考的外向)	Ag (-20.0)	Ag * HQ17(3) (-17.13)	Ag * HQ25(4) (-15.91)	Ag * HQ03(7) (-14.31)	Ag * HQ08(16) (-11.53)	Ag * HQ23(17) (-11.44)
R (のんかさ)	A * EQ15 (-28.25)	A * HQ18(2) (-27.13)	A * HQ09(8) (-20.23)	A * HQ23(12) (-17.49)	A * HQ20(24) (-15.54)	A * HQ25(30) (-13.78)
G (一般的活動性)	A * HQ19 (-34.46)	A * HQ21(3) (-33.51)	A * HQ20(7) (-31.03)	A * HQ25(10) (-26.70)	A * HQ06(16) (-24.89)	A * HQ08(18) (-13.78)
Ag (愛想の悪いこと)	A (-32.84)	A * HQ18(14) (-24.24)	A * HQ16(19) (-23.38)	A * HQ12 (-22.89)	A * HQ06(36) (-19.57)	A * HQ11(38) (-19.18)
Co (協調的でない)	G * EQ24 (-37.87)	O * HQ06(17) (-22.51)	O * HQ19(20) (-21.76)	O * HQ23(25) (-19.87)	O * HQ21(32) (-18.56)	O * HQ14(35) (-18.01)
O (客観的でない)	D (-35.08)	D * HQ05(5) (-29.15)	D * HQ25(15) (-26.98)	D * HQ2(23) (-25.10)	D * HQ23(27) (-18.56)	D * HQ17(28) (-23.91)
N (神経質)	C * CO (-38.33)	C * HQ20(2) (-36.14)	C * HQ23(7) (-28.57)	C * HQ12 (-24.70)	C * HQ05(25) (-23.56)	C * HQ21(28) (-23.18)
I (劣等感)	N * EQ23 (-29.06)	N * HQ08(14) (-19.08)	N * HQ21(16) (-18.78)	N * HQ12 (-17.73)	N * HQ25(29) (-16.43)	N * HQ23(31) (-15.55)
C (回帰性傾向)	N * D (-38.09)	N * HQ05(9) (-26.98)	N * HQ19(20) (-24.24)	N * HQ27(27) (-23.01)	N * HQ20(33) (-21.33)	N * HQ14(35) (-20.55)
D (抑うつ性)	O * C (-37.44)	O * HQ05(4) (-31.65)	O * HQ25(22) (-26.06)	O * HQ17(26) (-24.41)	O * HQ11(29) (-22.53)	O * HQ08(31) (-21.56)

これは、各YG特性と被服行動との多次元分割表分析を要約したもので一目で、被服行動項目との関連性を把握することができる。

以下では、この結果のなかからいくつかの集合性格因子と被服行動について詳しく考察する。

今回分析したAICによる多次元分割表分析では、着目変数に対する説明変数（55項目）の分割表の比較が行われる。すなわち、55組の分割表の比較分析である。文献¹⁶⁾によれば、各分割表間のAIC値差が1以上であれば分割表間に有意差があると判定される。CATDAPプログラムでは着目変数に対する説明変数の組合せのみでなく、2説明変数、3説明変数における情報量を算出し、当該着目変数に対する説明変数の最適組合せ変数を選択する。

以下において、それぞれのYG特性と被服行動項目との関連性について考察する。

5・1 一般的活動性因子（G）と被服行動

YG性格特性因子において活動的因子とされるのはG因子である。G因子を着目変数として場合の関連度の大きい順、AIC値の小さい順に並べたものが表5である。

表によれば、G因子（非行動性－活動的）に対して主導的集合因子であるA因子と被服行動のHQ19「外出する時着る服がなくて外出がいやになりますか」の組合せ（AIC値＝-34.46）が最適組合せとして選択され、次いでYG特性のA因子（AIC値＝34.10）、A

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

表によれば、着目変数のY G特性のG因子の全体比率は平均得点者が115人（58.7%）と約半数を占め、次いで低得点者（非活動的）が45人（23.0%）であり、高得点者（活動的）は36人（18.4%）となっている。

Y G特性のG因子に対して最適組合せであるY G特性のA因子とHQ19について考察すると、「支配性（A因子）では普通であり、外出時には着る服がなくていやになることがある」と回答した者が77人（39.3%）、次いで「支配性（A因子）では服従的であり、外出時には着る服がなくていやになる」45人（23.0%）であり、「支配性では普通であり、外出時には着る服がなくていやになることがない」22人（11.2%）、「支配性大で、外出時には着る服がなくていやになる」15人（7.7%）となっている。

つまり、一般的活動性も支配性すなわち指導者意識をも中庸な者が外出時には着る服がなくて外出するのがいやになると回答している。一方活動的で指導者意識の強い者においても外出時には着る服がなくて外出するのがいやになると思っているようである。衣生活論¹⁰⁾によれば、「衣服を着ると人間が変わるといふ。たとえば、外出着に着かえた時と、家庭着のままいる時では、精神的緊張度や行動、態度に大きな違いが生じてくる。人間はその着ている衣服によって、外観ばかりでなく、気持ちも変わり行動や態度に出る。」（取意）と論じている。本調査における学生の着衣意識と一致しており、外出時には自分自身にとって望ましいと思う衣服で外出したいという気持ちの顕われであろう。

5・2 情緒安定因子（D・C・I・N）と被服行動

Y G性格特性における情緒安定性因子群はD（抑うつ性）、C（回帰性傾向）、I（劣等感の強弱）、N（神経質特性）の基礎因子から成る。

D因子を着目変数とし、他のY G因子、被服行動項目および食行動項目変数のあわせて55項目を説明変数した場合の分割表分析でD因子に対して最も関連度の強い組合せ変数は、Y G特性のO因子（客観的因子－主観的因子）とC因子（気分の変化の大小）でA I C値は－37.44であった。D因子での本学学生の比率は楽天的傾向の者60.7%、ふつうのグループ37.2%であり、陰氣的傾向の者はわずか2%である。O因子とA因子との組合せを見ると、楽天的（D因子）の者のうち客観的（O因子）でかつ冷静（C因子）な者の割合が最も多く（43.7%）、客観的（O因子）でふつう（C因子）（16%）、ふつう（O因子）で冷静（C因子）、ふつう（O因子、C因子）の組合せがともに13%という結果であった。

着目変数であるD因子がふつうに属するグループでは、O、C因子ともふつうに属するものがグループ内の39.7%を占め、次いで、主観的（O因子）、ふつう（C因子）の組合せの20.5%である。

このようにD因子を着目変数とした場合の最適説明変数の組合せは、Y G特性のO因子とC因子が最も関連性の強い変数として選択されたが、1説明変数、2説明変数および3説明のすべての組合せ（100組）から被服行動項目で有意とみなされた組合せは、O因子とHQ 5

女子学生のY G性格特性における被服行動と食行動との関連性について

(A I C値=31.65) が4位に、やはりO因子とH Q25 (A I C値=-26.06) が22位で選択されている。

ここでは、着目変数たるD因子の楽天的なグループとふつうのグループ(陰気のグループは少数なので割愛)とO因子とH Q05との関連について考察する。

表7は、D因子で楽天的傾向を示す者のグループとふつうのグループのO因子とH Q05の分割表を示したものである。

表7 D因子とO因子及び被服行動H Q05の比率比較表

着目変数※ D因子	説明変数 O因子	比率(%・人)	説明変数 H Q05 (内訳比率)		
			男性の目を意識して服を着る		
			思う	思わない	わからない
楽天的	客観的	60.5 (72人)	31.9	55.6	12.5
〃	ふつうグループ	31.1 (37人)	43.2	43.2	13.5
〃	主観的	8.4 (10人)	20.0	30.0	50.0
ふつうグループ	客観的	16.4 (12人)	41.7	8.3	50.0
〃	ふつうグループ	52.1 (38人)	52.1	50.0	28.9
〃	主観的	31.5 (23人)	31.5	26.1	43.5

※D因子の冷静的グループは全体で2%なので割愛した。

楽天的傾向グループの60.5%はO因子で客観的傾向を示すグループに属するのに対して、ふつうグループでは16.4%に過ぎず、逆に楽天的グループでO因子が主観的である傾向を示す者が8.4%に対してふつうグループでは31.5%と大きな比率の差があらわれている。

これらのY G性格特性のD因子とO因子から被服行動のH Q05「男性の目を意識して服を着ていると思うか」の設問を考えると比率のうえで「思わない」者が「思う」者を超えているのは、D因子が楽天的、自己満足傾向の者でO因子が(客観的、常識的傾向)の組合せと、D因子、O因子ともに普通グループに属するもの、およびD因子が楽天的でO因子が主観的・自己中心的性向をもつグループである。逆に、「思う」者が「思わない」者の比率を超えているのはD因子が普通グループに属し、O因子が客観的・現実的性向を示すグループである。D因子が楽天的性向を示し、O因子が普通グループに属するものは「思う」、「思わない」が43.2%と同率であった。

次に、Y G性格特性のC因子を着目変数とした場合の被服行動についての多次元分割表分析を行ったところ最適変数の組合せは、Y G性格特性において同じ情緒安定-不安定要因の因子とされる。

N因子とD因子との組合せがA I C値-38.09で最適組合せとして選択された。前報¹⁸⁾でも述べたように、本学学生のC因子、N因子、およびD因子の傾向は、C因子では冷静的・

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

ふつうグループを含めて95%、N因子では神経質でないふつうグループを含めて92.4%、D因子でも楽天的・ふつうグループを含めて98%というように情緒不安定性の集合因子は情緒的安定を裏づける数値を示していたが、C因子を着目変数とした多次元分割表分析においてもその傾向を確認することができる。

表8に示したC因子を着目変数とした、最適変数の組合せである。N因子とD因子の3次元分割表からもその傾向を明らかにすることができる。

表 8

CONTINGENCY TABLE WITH THE OPTIMAL COMBINATION OF EXPLANATORY VARIABLES

X(1):YG@C#55 X(2):YG@N#53 X(3):YG@D#56

X X	RESPONSE VARIABLE			
	X(1)	1	2	3
1 1	54	15	1	70
1 2	5	13	0	18
1 3	1	0	0	1
2 1	17	27	1	45
2 2	6	32	6	44
2 3	0	3	0	3
3 1	1	2	1	4
3 2	1	9	1	11
3 3	0	0	0	0
TOTAL	85	101	10	196

X X	RESPONSE VARIABLE			
	X(1)	1	2	3
1 1	77.1	21.4	1.4	100.0
1 2	27.8	72.2	0.0	100.0
1 3	100.0	0.0	0.0	100.0
2 1	37.8	60.0	2.2	100.0
2 2	13.6	72.7	13.6	100.0
2 3	0.0	100.0	0.0	100.0
3 1	25.0	50.0	25.0	100.0
3 2	9.1	81.8	9.1	100.0
3 3	0.0	0.0	0.0	0.0
TOTAL	43.4	51.5	5.1	0.0

着目変数がC因子の場合の、被服行動で上位に選択される項目はN特性とHQ05の組合せ（A I C値=-26.98、9位）、N特性とHQ19（A I C値=-24.24、20位）等である。

5・3 社会的適応性因子（O、Co、Ag）と被服行動

YG性格特性因子において社会的適応-社会的不適応を形成する因子はO（客観的-主観的）、Co（協調的-非協調的）、Ag（消極的-積極的）因子である。そのうちAg因子は活動的-非活動的集合因子と重複している。これらの社会的適応因子と被服行動との関連性について考察する。

Ag因子の頻度集計は前報でも報告した通り、消極的46.2%、ふつう43.7%、積極的10.1

女子学生のYG性格特性における被服行動と食行動との関連性について

%であった。Ag因子を着目変数として3変数までの組合せ（100組）の分割表分析を行ったところA因子とG因子との組合せが最適組合せとして選択された（表9参照）

表9

	(説明変数)	カテゴリー数	AIC値	AICの差	
1	YG@A#46	3	-32.84	0.0	
2	YG@A#46	YG@G#49	9	-32.32	0.52
3	YG@G#49		3	-32.31	0.01
4	YG@A#46	YG@O#52	9	-30.83	1.48
5	YG@A#46	YG@C#51	9	-29.50	1.33
6	YG@A#46	YG@C#55	9	-29.41	0.09
7	YG@A#46	EQ26#36	6	-28.58	0.84
8	YG@A#46	EQ32#39	6	-26.48	2.10
9	YG@A#46	EQ27#37	6	-26.17	0.31
10	YG@A#46	YG@T#47	9	-26.07	0.10
11	YG@A#46	EQ23#34	6	-25.01	1.07
12	YG@A#46	EQ39#43	6	-24.52	0.49
13	YG@A#46	YG@R#48	9	-24.29	0.22
14	YG@A#46	HQ18#14	9	-24.24	0.05
15	YG@A#46	EQ18#33	6	-24.08	0.17
16	YG@R#48		3	-24.03	0.05
17	YG@A#46	EQ24#35	6	-23.79	0.24
18	YG@A#46	YG@I#54	9	-23.55	0.24
19	YG@A#46	HQ16#12	9	-23.38	0.17
20	YG@G#49	EQ32#39	6	-23.12	0.27
21	YG@A#46	EQ17#32	6	-22.96	0.16
22	YG@A#46	HQ12#10	9	-22.89	0.07
23	YG@A#46	EQ16#31	6	-22.62	0.28
24	YG@A#46	EQ15#30	6	-22.29	0.33
25	YG@A#46	EQ37#41	6	-22.26	0.03
26	YG@A#46	YG@D#56	9	-22.18	0.08
27	YG@A#46	EQ30#38	6	-22.17	0.01
28	YG@A#46	EQ04#29	6	-22.02	0.15
29	YG@C#51		3	-22.00	0.01
30	YG@C#55		3	-21.90	0.11
31	YG@A#46	EQ38#42	6	-21.85	0.04
32	YG@A#46	EQ40#44	6	-21.77	0.08
33	YG@A#46	EQ03#28	6	-20.93	0.84
34	YG@A#46	EQ36#40	6	-20.76	0.17
35	YG@T#47		3	-20.00	0.76
36	YG@A#46	HQ06#4	9	-19.57	0.44

以下省略

被服行動項目ではA因子とHQ18の項目が100組中14番目に選択され、次いで、組合せA因子とHQ16が19番目に選択されている。HQ18とHQ16の項目はそれぞれ「持っている服は少なくとも組合せて変化をつける（HQ16）」、「今日どんな服を着ようかと考えるのが楽しいか（HQ18）」という設問からわかるように、これらの設問は被服着用に対する積極性、工夫性を問う設問であり、Ag因子に関してA因子と共にこれらの被服行動項目が有数な変数として選択されたことは性格特性と被服行動を見るうえで興味深い。

表10において、HQ18「今日どんな服を着用するかが楽しみ」という被服行動の設問を軸に「そう思う」と回答した者の比率を見ると、比率としてはAg因子において「服従的傾向」を示し、A因子では普通グループの組合せの者が66.7%で最も多く、Ag因子が「支配性傾向」でA因子が普通グループの組合せの者が53.3%と続く。Ag因子が服従的でA因子が消極的傾向を示す者は全被験者の52.8%を占めるが、HQ18に対する反応は「楽しみと思う」、「その思わない」とも同率の43.8%である。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

表10 Ag因子とA因子及び被服行動（HQ18）の比率比較表

着目変数 Ag 因子	説明変数 A 因子	比率（％・人）	説明変数 HQ18（内訳比率）		
			今日どんな服を着用するかが楽しみ		
			思う	思わない	わからない
消極的傾向	服従的傾向	52.8（48人）	43.8	43.8	12.5
”	ふつうグループ	45.1（41人）	48.8	46.3	4.9
”	支配性傾向	2.2（2人）	50.0	0.0	50.0
ふつうグループ	服従的傾向	17.7（15人）	66.7	26.7	6.7
”	ふつうグループ	64.6（55人）	41.8	29.1	29.1
”	支配性傾向	17.7（15人）	53.3	33.3	13.3
積極的傾向	服従的傾向	10.0（2人）	0.0	50.0	50.0
”	ふつうグループ	60.0（12人）	41.7	25.5	33.3
”	支配性傾向	30.0（6人）	50.0	16.7	33.3

表11 Ag因子とA因子及び被服行動（HQ16）の比率比較表

着目変数 Ag 因子	説明変数 A 因子	比率（％・人）	説明変数 HQ16（内訳比率％）		
			服の枚数は少なくとも上手に組合せて変化		
			思う	思わない	わからない
消極的傾向	服従的傾向	52.8（48人）	95.8	0.0	4.2
”	ふつうグループ	45.1（41人）	85.4	4.9	9.7
”	支配性傾向	2.2（2人）	50.0	0.0	50.0
ふつうグループ	服従的傾向	17.7（15人）	86.7	13.3	0.0
”	ふつうグループ	64.6（55人）	91.0	7.3	1.7
”	支配性傾向	17.7（15人）	100.0	0.0	0.0
積極的傾向	服従的傾向	10.0（2人）	50.0	50.0	0.0
”	ふつうグループ	60.0（12人）	91.7	8.3	0.0
”	支配性傾向	30.0（6人）	83.3	16.7	0.0

Ag因子が積極的傾向を示し、A因子が支配性大のグループの者は全体としては30%いるが、内訳では「思う」50%、「思わない」16.7%で、「楽しみに思う」比率が多く、被服着用を積極的に楽しもうとする姿勢が数値上にあわられている。

次に表11について見ると、HQ16「服の枚数が少なくとも上手に組合せて変化をつけているか」という被服行動に対するYG性格特性因子の関連性を見るとAg因子における消極的傾向の者、A因子における服従的傾向を示す者のグループの95.8%が「そう思う」と回答し、Ag因子が積極的な傾向を示し、A因子が普通グループに属する者の91.7%がやはり「そう

女子学生のY G性格特性における被服行動と食行動との関連性について

思う」と回答している。また、Ag因子が積極的傾向のグループに属し、A因子が支配性大傾向に属する者も83.3%であるが「そう思わない」者も16.7%とかなり多い。Y G性格特性因子の側面からHQ16の項目についてみると、消極的傾向であり、かつ服従的傾向の者に「そう思う」という肯定者が多く、積極的傾向—支配性傾向大のグループに属する者に「服の枚数は少なくとも上手に組合せて変化をつけて着る」という被服行動に対し、否定派が比較的多いことがわかった。

5・4 主導的集合因子（A、S）と被服行動との関連

Y G性格特性において主導的集合因子とされるのは、A因子（服従的—支配性大）とS因子（社会的内向—社会的外向）である。S因子を着目変数としてY G性格特性、被服行動項目、食行動項目の55項目を説明変数として1変数のA I Cによる分割表分析を行ったところ、表12に示すように同じ主導的集合因子であるA因子がA I C値-27.33で単一変数では最も関連性の強い変数として選択された。次いで、Y G性格特性のI因子（劣等感小—劣等感大）

表12

(説明変数)		カテゴリー数	AIC値	AICの差
1	YG@A#46	3	-27.33	0.0
2	YG@I#54	3	-18.57	8.76
3	YG@R#48	3	-17.54	1.03
4	YG@G#49	3	-12.84	4.70
5	YG@T#47	3	-11.14	1.70
6	YG@D#56	3	-9.60	1.54
7	HQ03#2	3	-9.30	0.31
8	HQ05#3	3	-7.50	1.80
9	HQ25#19	3	-6.91	0.59
10	HQ14#11	3	-5.07	1.83
11	YG@O#52	3	-4.05	1.03
12	YG@CO#51	3	-3.70	0.34
13	HQ06#4	3	-2.85	0.85
14	YG@N#53	3	-2.22	0.63
15	HQ19#15	3	-2.15	0.07
16	HQ10#8	3	-0.53	1.62
17	HQ12#10	3	-0.50	0.03
18	HQ26#20	3	-0.39	0.11

以下省略

でA I C値-18.57であり明らかにS因子に対するA因子とI因子間に有意差があることがわかる。S因子に対する被服行動項目では、7番目にHQ03（A I C値=-9.30）、8番目にHQ05（A I C値=-7.50）、次いでHQ25（A I C値=-6.91）、HQ14（A I C値=-5.07）と被服行動項目が選択されている。

次いで、複数の説明変数の組合せにより最適変数を算出したところ着目変数S因子に対してはA因子が最適変数として選択され、被服行動ではA因子とHQ09（A I C値=18.90）、A因子とHQ03（A I C値=-18.85）の組合せが友好的組合せとして選択された。ここでA * HQ9とA * HQ03のA I C値差は0.5でありS因子に対しては同程度の関連性の強さをあらわしているといえる。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

表13はS因子に対するA因子とHQ09の分割表の比率を示したものである。

表13から明らかのように、HQ09の「自分の服に対して他人はどう思っているか気にするほうですか」について「気にする」という者のグループを着目変数であるS因子と説明変数のA因子について見ると、性格性向が「地味で」、「服従的傾向」のグループの者が68.4%と最も高い比率を示し、次いで、S因子、A因子とも「普通」のグループに属する者の66.7%である。逆にHQ09「自分の服に対して他人はどう思っているか気にするほうですか」について、気にしないグループで比率が高いのはS因子で社会的グループに属し、A因子が「普通グループに属する者」が50%、S因子が「地味的傾向」でA因子が「支配性大」のグループの者が40%であるが、この組合せは全体で3.7%と少ない。

着目したいのはS因子が「地味」でA因子が「ふつう」のグループといずれのYG因子とも「普通グループ」に属する者の比較である。前者は「気にする」52.7%に対して後者は66.7%、「気にしない」では前者は33.8%に対して後者は23.3%であり、被服に対する他人の目という観点からするとS因子で地味傾向というグループに属し、A因子では「普通グループ」に属する者にHQ09に対して「気にしない」比率が多いことがわかった。全体の比率では54.4%、58.8%とほぼ同比率である。S因子の社会的とA因子の支配性大傾向の者のグループはごく少数（4人）なので積極的な評価はできないが、HQ09に対して「気にする者」が75%を占める。

表13 S因子とA因子・HQ09の比率比較表

着目変数 S因子	説明変数 A因子	比率（%・人）	説明変数 HQ09（内訳比率%）		
			自分の服装に対して他人がどう思うか気にするか		
			気にする	気にしない	わからない
地味	服従的	41.9（57人）	68.4	28.1	3.5
”	ふつう	54.4（74人）	52.7	33.8	13.5
”	支配性大	3.7（5人）	40.0	40.0	20.0
ふつう	服従的	13.7（7人）	42.9	14.3	42.8
”	ふつう	58.8（30人）	66.7	23.3	10.0
”	支配性大	27.5（14人）	57.1	14.3	28.6
社会的	服従的	11.2（1人）	0.0	0.0	100.0
”	ふつう	44.4（4人）	25.0	50.0	25.0
”	支配性大	44.4（4人）	75.0	0.0	25.0

次に主導的因子のA因子について多次元分割表分析を行ったところG因子とS因子の組合せ（AIC値=-37.26）が最適変数として選択された。ここで被服行動項目ではHQ21（新しい服を買うとき気に入ったら、すぐ買うか）、HQ19（服がなくて外出がいやになる）

女子学生のYG性格特性における被服行動と食行動との関連性について

がそれぞれG因子との組合せにより選択されたが、いずれの設問項目ともYG性格特性のG特性（非活動的－活動的）と結びついてA因子に対する有効な変数として選択されており、活動的－非活動的という性格特性が被服の購買行動に関する項目との間で関連性が認められたことは、興味深いことと思われる。

6 おわり

いくつかのYG性格因子と被服行動について検討したが、YG性格特性については本来、被験者個々の性格特性を明らかにし、カウンセリング、学生相談に役立たせるのが本来の目的であることは承知するが、被服行動調査項目にあらわれる同調性に対する反応と評価、自己表現や流行意識の捉え方、被服素材の選択の購買意識といった判断には多分に性格特性の影響との関与が考えられる。今回の分析によりいくつかの興味ある結果が得られたので、これらのデータをより広範に蓄積して、さらに、探索的な被服行動調査を持続したいと考えている。

なお、和服着装行動について見ると、従来和服と洋服とでは嗜好感覚が異質のものと考えられていたが、若い世代においては着装意識行動について、伝統きものと服飾デザイナーズ・ブランドきものとの嗜好が区別されている。被験者にとってはブランドきものはファッションとして捉えられ、着物に寄せる関心の高さが本調査結果で示された。

謝辞

本研究の調査データ分析に当り、終始御懇切な御助言を賜りました京都大学大型計算機センター、高井孝之氏に深く感謝し、厚く御礼を申し上げます。

文献

- 1) 堀川諭：食行動と身体イメージ、大手前女子大学論集、25（1991）。
- 2) 笹山益子・堀川諭・青海邦子：本学学生の被服行動とYG性格特性との関連性について；大手前女子短期大学研究集論、11（1991）。
- 3) Katsura, K. and Sakamoto, Y.:CATDAP, Computer Science Monographs, No.14, The Institute of Statistical Mathematics, Tokyo(1980).
- 4) 高井孝之：(ATDAP) 概説、京都大学大型計算機センター広報、Vol.22, No. 4（1989）。
- 5) SAS USER'S GUIDE:Basic 1982Edition, SAS Institute Inc.,（1982）。
- 6) 笹山・堀川・青海：前掲書（1991）。
- 7) 阿倍幸子ほか：衣生活論、同文書院（1990）。
- 8) 藤原康晴ほか：日本家政学会誌、40、137（1989）。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

- 9) 阿倍幸子ほか：前掲書。
- 10) 笹山益子・青海邦子ほか：女性の食生活と衣生活における消費実態と意識、大手前女子短大研究集録、5（1983）。
- 11) 笹山益子・青海邦子：性格調査との関連からみた本学学生の被服に対する意識と行動について、大手前女子短大研究集録、8（1988）。
- 12) 「Ki-mono、企画催事販売の明と暗」：K・K織研新聞社、（1992）。
- 13) 笹山益子・堀川諭・青海邦子：女子学生の被服行動に影響を及ぼす性格と食行動における諸要因について検討、大手前女子短大研究集録、12（1992）。
- 14) 八木俊夫：新版 YGテスト実務手引、日本心理技術研究所、（1990）。
- 15) 笹山・堀川・青海：前掲書、（1991）。
- 16) 坂元慶行、石黒真木夫、北川源四郎：情報景統計学、共立出版（1983）。
- 17) 阿倍幸子ほか：前掲書。
- 18) 笹山・堀川・青海：前掲書（1991）。